

雲南省昆明に至るべき遠征隊を派遣することにしました。同時に英國領事館附書記生マーガリが、上海から漢口に出で、湖南・雲南を経てバモに出で、此處で準備を整へ待つて居たブラウン大佐に會し、その通譯兼案内者となつて雲南に向つて引返しましたが、途上ブラウン大佐に別れて出發し、雲南の一驛で何者かのために殺され、またブラウン大佐も支那兵のために圍まれ、目的を遂げずにビルマに引返しました。此の路が、今度の支那事變に至つて開通した所謂ビルマ・ルートであります。イギリスは、此のマーガリ事件を口實として支那を威嚇し、此の年所謂芝罘條約を結びましたが、イギリスは此の條約によつて、支那又は印度から自由に西藏に入國し得るやうになり、爾來、着々西藏に勢力を扶植し、そのために幾度か支那と衝突しましたが、その都度支那は讓歩するだけでありました。そしてイギリスは西藏を勢力範圍とすることによつて、一面ロシアの印度侵略に備へ、他面之を足場として雲南・四川への進出を執拗に續けたのであります。若し新興日本が支那保全を以て其の不動の國是とし、且つ此の國是を實行する

力を具へて居なかつたならば、既に阿弗利加大陸の分割を終へ、滿幅の帝國主義的野心を抱いて東亞に殺到し來れる歐米列強は、必ず支那分割を遂行し、イギリスは當然獅子の分前を得たことと存じます。現に支那・印度・西藏に活躍せる名高きイギリス軍人ヤングハズバンドは、支那の如く土地は廣大、物産は豊富、而も其の全地域が人間の住むに適する温帯圈内に横はる國土を、一個の民族が獨占して居るのは、神の御心に背く——Against God's Will. だと公言して居るのであります。日本の強大なる武力は、幸にして支那を列強の俎の上にせなかつたのであります。それでもイギリスの政治的・經濟的進出を拒むに由なく、支那の最も大切な動脈揚子江に於て、わけてもイギリスの勢力は嶄然他を凌いで強大となつたのであります。従つて日本が長江に經濟的進出を始めるに及んで、其の最も手強き妨害者はイギリスであつたのです。其の數々を列擧することは時間が許しませんが、唯一つイギリスの惡辣なる妨害とは如何なるものであつたかを示す實例を擧げます。それは日英同盟が結ばれた翌年即ち一九〇二年に、日本郵船



會社が、曾て三十年間揚子江に航路を張つて居た英人マクベーンの事業を數百萬圓で買收し、其の船に社旗を掲げて揚子江航路を開始すると、稀代の珍事が起つたのであります。即ち上海・漢口を初め揚子江岸諸港の英國人居留地會が、郵船會社の船には一切今までマクベーン船舶の繋留せる水面に立寄るを許さずといふ決議をしたことであります。これは地所は賣つたが空中權は賣らないから、家を建ててはならぬといふに等しい無理難題であります。日本は極力抗議したけれど、英人は頑として聽き入れず、郵船會社は百計盡きてフランス人に交渉し、不便ではあつたがフランス居留地の水面に繋船し、遠く倉庫から迂回して荷物を揚卸しすることに成つたのであります。之が後の日清汽船會社の前身であります。日本はイギリス人の同様の意地悪き妨害と幾度か戦ひながら、とにもかくにも長江流域に今日までの地位を築き上げたのであります。日本の長江發展史は、取りも直さずイギリスとの經濟闘争史であります。

## 第六日

中央亞細亞のバミール高原は、古より世界の屋根と呼ばれて居ります。此の高原から斜めに西南に走る山脈はスライマン山脈と呼ばれ、印度とアフガニスタンの國境を走つて印度洋に盡きて居ります。また此の高原から北に走るものは天山山脈と呼ばれ、モンガリア盆地に於て一旦杜絶した後、再びアルタイ山脈となつて東北に延び、更にヤプロノイ山脈・スタノボイ山脈となつて一層東北に向ひ、遂に亞細亞大陸の東北端イースト・ケープとなつてベーリング海峽に突出して居ります。即ち南はインダス河口から北はベーリング海峽に至るまで、亞細亞大陸は西南より東北に走る蜿蜒萬里の山脈によつて、まさしく兩斷されて居るのであります。この山脈は世界の屋根の長い長い棟であります。而してこの屋根によつて舊世界は東洋と西洋との二つに分たれて居ります。即ちこの屋根の棟の東南斜



面が東洋であり西南斜面が取りも直さず西洋であります。ヘルシア・小亞細亞・アラビアの諸國は、亞細亞のうちに含まれては居りますが、之を地理學の上から見ても、また世界歴史の上から見ても、明かに西洋に屬するものであり、眞實の意味の東洋は疑ひもなくバミール高原以東の地であります。

此の東洋の世界はヒマラヤ山脈に起り、崑崙山脈となり、東へ東へと進んで支那海に至つて盡きる東西萬里の山脈によつて、更に南北に兩分されて居ります。南方即ちヒマラヤ山脈の南斜面は印度であり、ヒマラヤの北、天山アルタイ兩山脈の東が取りも直さず支那であります。而して印度と總稱されるヒマラヤ山脈の南斜面は、更に東西兩部に分たれ、西なるはヒンドスタン・インド人の國、即ち狭い意味の印度であり、東部はビルマ・タイ・安南等を含む謂はゆる印度支那で、其の名の如く地理的にも歴史的にも、東洋の偉大なる二つの部分、印度及び支那の中間に位する國土であります。

印度と支那とは、東洋の二つの偉大なる中心であります。兩者の面積は殆んど

相同しく、人口はまた各々數億を數へ、ヒマラヤ山脈によつて南北相隔てられ、一方には蒙古人種、他方にはアリヤン人種が住み、一方は温帶、他方は熱帶、相距ることも遠く、相異なること大であります。東洋は實に此の二つのものの結合によつて一つの全體をなして居るのであります。而して我が日本は此等の東洋の二つの中心から、實に幾多の貴きものを學び、善きものを習ひ、之を自身の精神の裡に統一し、之を生活の上に實現しつつ今日に及んだのであります。西洋人が渡來するまで、日本人に取つて世界とは實に支那と印度、即ち唐と天竺とを中心とする東洋を意味し、此の兩國に我が日本を加へて三國と稱へて來たのであります。三國一の花嫁とは世界第一の花嫁のこと、三國一の富士山とは支那にも印度にもない世界一の立派な山のことであつたのであります。三國妖婦傳といふ物語では、九尾の狐が、支那・印度・日本三國の宮廷を囁しまはつて居ります。それ故に支那と印度とは、我々にとりては、少くとも我々の祖先にとりては、決して他國ではなかつたのであります。日本は此等の國から數々のものを學んだので、



管に他國でないのみならず、實に大切な國、有難い國であつたのであります。然るに今や釋尊が生れ、孔孟が生れた其の大切な國が、イギリスの屬國となり、その半植民地と成り果てて居るのであります。

我々が印度から學んだ最も貴いものは宗教であります。即ち印度思想・印度文明の精華と申すべき佛教の信仰であります。我々の祖先が如何に誠實に此の教を學び、此の教の生れた印度に憧憬して居たかを示すため、幾多の例を擧げることが出来ませんが、最も私の心を打つた一つだけを申し上げます。それは鎌倉初期の高徳、京都梅尾の明惠上人のことであります。此の上人は印度に渡つて佛蹟を巡禮したいといふ抑へ難い願ひから、其の巡禮の筋道を事細かに調べ上げ、支那の都の長安から印度の王舍城までは八千三百三十里、日に八里づつ歩けば千日、日に五里づつ歩けば、正月元日に長安を出發して五年目の六月十日の午刻に王舍城に辿り着く、天竺は佛の生國なり、戀慕の思抑へ難きにより、遊意をなして之を計る、あはれあはれ參らばやと書いて居ります。不幸病のために印度巡禮の願は遂

げられなかつたが、印度から渡つて來た竹を見るに、日本の竹と異なる所がない。さすれば釋尊當時の竹林園の竹もまたかやうな竹であらうと、一むらの竹を學問所の前に植ゑつけ、之を竹林竹と名けて、あけくれ眺めて居たのであります。まことに激しい思慕のこころと申さねばなりません。若し此の明惠上人が、今日蘇つて印度の現状を見、印度がイギリスの鐵鎖に縛られ、其の民は牛馬の如く虐げられて居るのを見たならば、血涙を流して悲しみ、火の如く激しく憤ることであらうと存じます。

我々は印度の佛教から、信仰だけを學んだのではありません。佛教は同時に五明即ち五つの學問を我々に教へて居ります。第一は因明で、論理の講究、第二は内明で、教典の研究、第三は聲明で、言語音律の研究、第四は醫方明で、醫術の研究、第五は工巧明で、工藝美術の研究であります。而も教典の研究のうちには、佛典以外の儒教の經典をも含み、寺は寺小屋と呼ばれて國民教育の機關となり、その教科書には儒教の經典が用ゐられて居たのでありますから、佛教は日本に取



りて一個の宗教であつたのみならず、同時に文化の綜合體であつたのであります。即ち印度文化全體が釋尊又は佛教を通じて我國に傳へられ、その佛教の眞理は、いろいろなる理論によつてに非ず、生活體驗によつて日本人の魂に浸み込んだのであります。従つて佛教徒たると否とを問はず、我々日本人は甚だ多くを釋尊の印度に負うて居るのであります。それ故、眞實の日本人である限り、多かれ少かれ明恵上人が抱くであらう所の悲しみと憤りとを感ぜねばならぬ筈であります。それでありますから、我々日本人が英國の印度統治に對して加へる彈効は、一昨日紹介したアメリカのブライヤンが加へる如き、單なる人道主義に據る道德的非難たるに止まらず、同時に我心と我身とに加へられたる辱しめを感じての義憤であります。現代印度革命思想の生みの親アラビンダ・ゴシユは「壓制者あり、我母の胸に坐す。我母を此の壓制者より救ふまで、我は斷じて息まず」と誓つて居りますが、我々は此の悲壯なる覺悟を、我々自身の覺悟の如く身に沁みて感ずるものであります。私は此の度の對米英戰爭に於ける日本の勝利が、必ず印度獨

立の機縁となり、導火線となつて、古へ釋尊より受けたる教に對する最も善き贈物として、自由を印度に與へ得るに至らんことを切望するものであります。

日本と印度との間のかくの如き關係は、支那との場合に於ても同然であります。我々は支那文明の精華と申すべき孔孟の教を支那から學んだのであります。我々は、總ての生活の基礎を倫理に置かねばならぬこと、即ち人格の上に置かねばならぬといふ高貴なる精神を、極めて明晰なる理論を以て儒教から學んだのであります。のみならず、江戸時代三百年の間、學問と申せば支那の學問でありましたので、政治・道德・文學、あらゆる方面に於て善かれ悪かれ支那文化は國民生活の隅々に浸透し、印度が然る如く支那もまた我身我心の一部となつたのであります。其の上支那は印度と異なり、一衣帶水の間柄でありますから、多くの支那人が日本に来て、彼等の血が日本人の血に混つて居ります。中國の大大名であつた大内氏も、薩摩の島津家も、遠く其の祖先をただせば、朝鮮を経て日本に渡つて來た支那人だと言はれ、一徹短氣で名高い赤穂義士の武林唯七は孟子の子孫だと



も申されて居ります。純然たる日本文學と考へられて居る紫式部の源氏物語でさへ、其の思想も、その文學としての結構も、明かに漢學漢文から脱化したものであります。大寶令は御承知の如く支那の法律制度を模範としたものであります。我等の先祖は日本の歴史を學ぶと同じ程度の親しみを以て支那の歴史を學び、日本の英雄豪傑を崇拜すると同じ程度の熱心を以て支那の英雄豪傑を崇拜したのであります。諸葛孔明の出師表は、どれほど日本人に忠義の心を鼓吹したか知れず、岳飛の誠忠がどれほど士氣を鼓舞したか測り知れぬほどであります。日本人中の最も偉大なる日本人西郷隆盛が、如何に伯夷叔齊の高潔なる心事に傾倒して居たかは、彼自身の文章によつて知ることが出来ます。わけても支那文學が甚だしく日本人に喜ばれ、漢詩を作ることは、教養ある人士に缺くべからざる條件の一つとさへなつたので、支那の詩歌文學に現れて來る山や川は自分の故郷の地名の如く日本人の耳に響いたのであります。黄河も揚子江も、赤壁も寒山寺も、乃至西湖も洞庭湖も、皆な我々の耳に久しく聞き馴れて居りますので、例へば「揚子江

頭楊柳の春、楊花は愁殺す江を渡るの人」といふ詩を吟ずれば、我々は支那の詩人が、長江に寄せた綿々の哀愁を、自ら揚子江畔に立つて感ずる如く感じます。また「洞庭西に望めば楚江分る、水盡きて南天雲を見ず」と歌へば、洞庭湖は決して他國の湖とは思へないのであります。かやうな次第で日本と支那との間には、心の境がなくなつて居たのであります。日本人と支那人とは、「我々」といふ一人稱を用ふべき兄弟であります。此の支那が、國民の身と心を蝕ばみ盡す阿片吸飲のあさましい風習を止めるために、阿片輸入を禁止するのは當然至極のことでありましたが、それが承知罷りならぬといつて武力を用ゐたのが實にイギリスであります。イギリスは、一切の道徳を無視し、毒藥を賣込んで金儲をしようといふ一群の商人の食欲なる希望を満足させるために、その軍隊を用ゐたのでありますから、英國軍隊を貫く精神は、ホーキンス、ドレーク等の昔ながらの海賊精神であります。今も昔も變りなき此の海賊精神を以て、イギリスは支那に臨み、必要あれば武力を以て、然らざる時は買収と外交的術策と威嚇とを以て、遂に支那



を其の半植民地とし、支那民族を最も都合よき搾取の対象としたのであります。イギリスの對支政策は形こそ變れ、大砲の筒先を向けて、恐るべき阿片を突きつけ、飲まねば打つぞと言つた其の精神の種々の現れであります。

日本が支那の領土保全を不動の國是として來たのは、其の奥深き根柢を、日本人の眞心に有して居ります。支那の文明は黄河と楊子江の流域に起り、その文明は我が日本の生命と生活とのうちに、今尙ほ潑刺として生きて居るのであります。それ故に何はともあれ、黄河、楊子江の流域が他國の手に奪はれるに忍びない、飽くまでも之を漢民族の手に保存させて置きたいといふのが、自づと湧き上がる日本民族の赤誠であります。支那は、此の赤誠より進れる日本の政策のために、イギリスの、又はロシアの奴隸となり果てずに済んだとは申せ、年久しく歐米の資本主義並に帝國主義角逐の舞臺となつて來たので、年一年と自國の貴重なる文化を犠牲にする危険に曝されて參つたのであります。曾ては東亞の國々をあれほど豊かにした支那文化は、巧みに支那の統一を破る術を心得て居る歐羅巴帝國主

義的諸國、就中イギリスの侵入と共に、内的にも外的にも弱められて、つひに偉大なる過去の、單なる影と成り下らんとして居ります。のみならず、イギリスの巧妙なる搾取と相並んで、今やボルシェビズムの暗い力が新たに支那の舞臺に現れ、衰へたる支那を其の勢力の下に置き初めたので、支那の文化は破壊崩潰に對して、益々無抵抗に曝されるに至つたのであります。日本は自國の文化と、支那に於て脅されつつある東洋文化を救ふために、あらゆる努力を續けて戦ひ來れるに拘らず、支那は起つて我等と共に東洋を護り、亞細亞を滅ぼす勢力と戦はんとはせず、却つて刃を我等に向け來つたのであります。而して、東洋の敵たる英米と手を握り、今尙ほ東洋を救ひつつある日本と戦ひ續けんとするのであります。もとより南京政府は既に樹立せられ、汪精衛氏以下の諸君は、興亞の戦に於て我等と異體同心になつて居りますが、支那國民の多數は其の心の底に於て尙ほ蔣政權を指導者と仰ぎ、日本の眞意を覺らんとせず、却つて日本に反抗しつつあることは、悲痛無限に存じます。さりながら明治維新を願ひましても、各藩に勤皇



一年であります。私は日本の覺悟と努力とによつて、英米の運命また蒙古のそれの如くなるべきことを信じて、此の不束なる講演を終ることと致します。

28/5/27

# 米英東亞侵略史



昭和十七年一月二十三日印刷  
昭和十七年一月二十八日第一刷二萬部發行

定價一圓二十錢

著者 大川 周明

刊行者 東京市麹町區三番町一  
長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一  
第一書房

電話東京六四二二三  
電話九段三四一五

東京市銀座敷寄屋橋

發兌 第一書房

電話東京五九八七

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

外地定價一圓三十二錢

有、土地の事情に依り  
尙割増することあるべし。

會員登錄番號  
一一六五〇八

\*落丁・原丁の際は直接本社にてお取替へ致します。

印刷者 東京市牛込區山吹町一九八 荻原芳雄



法學博士 大川周明著

## 亞細亞建設者

四六判四二八頁  
定價一圓八十錢

此等の英雄は、國運既に窮まり、國民總て希望を失ひ、或は號哭し或は自棄する以外、また爲すところを知らざりし時、屹然立つて民族の命脈を一身に負擔し、芽出度き春を其の國々に回らしめた。予は今更の如く、一人能く國を興し、一人能く國を亡すと言へる古人の言葉を、身に沁みて感ぜざるを得ない。

予は特に五人の英雄を擇び、その慘澹たる善戰健闘の生涯を敘べることによつて、彼等の生れし國々の試煉と刻苦と更生の姿を、一層如實に示さんと志した。世を擧げて盧山の雲霧に彷徨しつゝありし時、獨り卓然として機運の趨くところを徹見し、自ら陣頭に立つて亜細亞を正しき動向に導けるものは、實に彼等の莊嚴なる魂に外ならぬ故である。

(著者の序より)

法學博士 大川周明著

第一書房・戦時體制版 價七十八錢

## 新訂 日本二千六百年史

近日増刷出版



SHIPPING ADVICE # 10125

SACK # 6

ITEM # 131